

英 語 科

肥 沼 則 明
植 野 伸 子
中 島 真紀子
栖 原 昂

新学習指導要領を踏まえた指導のあり方（2）

－「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習者の育成－

1. はじめに

(1) 新学習指導要領について

平成29年3月31日に公布された小学校及び中学校の新学習指導要領の改訂の基本方針では、育成すべき資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つに再整理した。また、各教科の目標に教科独自の「見方・考え方」（外国語科は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」）を新たに組み込み、指導の方向性として「主体的・対話的で深い学び」を目指すように謳っている。一方、現行の高等学校学習指導要領と同様に、中学校外国語科（英語）の具体的な指導法として、「授業は英語で行うことを基本とする」ということも示された。私たち教員にとって、これらはかなり大きな変更点であるが、今回の変更の目玉である道徳の教科化や小学校高学年における英語の教科化があまりにもインパクトが強かったため、具体的な形として見えないこれらの変更点は、今でも十分に咀嚼できていないとも言えないであろう。ただし、昨年7月に文部科学省のホームページで公表された学習指導要領の解説（文部科学省、2017b）をよく読むと、改訂の基本方針の根底に流れていることは決して新しいことではなく、むしろこれまでも大切だとされながら、なかなか教育現場で実行されてこなかったことを、新たな切り口を加えてより細かく説明しようとしているのだということに気づくはずである。したがって、まずは学習指導要領をしっかりと読み込み、学習指導を行う上で大切にすべきことは何なのかを改めて理解する必要がある。

(2) 本校英語科のこれまでの歩み

本校英語科は、その前身である東京高等師範学校附属中学校時代の明治43（1910）年には既に、英語を英語のまま理解するには音声中心の訓練から始めることや、英語の授業をできる限り英語で行うこと等を、現在の指導計画にあたる『教授細目』（東京高等師範学校附属中学校、1910）に定めて授業を行っていた。さらに、大正12（1923）年にH.E.パーマーが同校を氏の提唱する「オーラル・メソッド」の実践校としてからは、同指導法に則った形で「聞くこと」「話すこと」を中心としたその指導法を脈々と受け継いできた。もちろん、その伝統に甘んじることなく、時代の変化を見定めながら、目の前にいる生徒の実態に合った指導法を確立すべく新たな取り組みもしてきている。そして、現場の指導者として本当に必要なことは何かということに重点を置いた研究を進め、その成果を以下のように研究協議会で発表してきた。

- 平成8～11年度…「育てたい生徒像」を設定し、「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成した。
- 平成12～15年度…「自立した学習者」を育てるための4つの要素を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案した。
- 平成16～18年度…入門期指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。
- 平成19年度……小中連携と中高連携を意識した中学校の具体的指導事項を提案した。
- 平成20～24年度…「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに、技能統合的な活動の例、カリキュラム編成上の課題、新しい教科書への対応、小中連携を考えた入門期指導の実践例などを提案した。
- 平成25年度……「意味を伝える音声指導」をテーマに、授業における様々な工夫や具体的な指導内容を提案した。
- 平成26年度……「『読める』生徒を育成する系統的指導」をテーマに、生徒が最終的に長文をスラスラと読めるようになるための指導内容を提案した。
- 平成27年度……「確かな英語力を身につける学習者の育成」をテーマに、主体的に学習する生徒を育てる指導のあり方を提案した。
- 平成28年度……「『授業は英語で行う』ことの基本と留意点」をテーマに、授業を英語で進めるための基本的な考えと具体的な方法を提案した。
- 平成29年度……「新学習指導要領を踏まえた指導のあり方（1）」として、授業を実際のコミュニケーションの場面にするための具体的な方策を提案した。

このように、本校英語科は時代の要請による事柄はもちろんのこと、英語教育において恒久的に追究されるべき内容も研究してきた。そして、英語科教員全員が最終的に「育てたい生徒像」に関して共通理解をもち、誰が、いつ、どの学年の、どのクラスを担当しようとも、生徒が戸惑わないような一貫した指導を心がけながら、日々の学習指導を行ってきている。

2. テーマ設定の理由

中学校の新学習指導要領の完全実施を3年後に控えた本年度は、これまでの本校の研究や実践、また、昨今の英語教育界における諸議論などを考え合わせ、「新学習指導要領を踏まえた指導のあり方(2) - 『主体的・対話的で深い学び』を実現する学習者の育成 -」をテーマに研究を進めることになった。主な理由を以下に述べる。

(1) 学習指導要領の観点から

「主体的・対話的で深い学び」というフレーズは、次期学習指導要領の中で、授業改善の視点として位置づけられている(文部科学省, 2017a)。すなわち、このような学びを実現する視点から「どのように学ぶか」を追究することが、授業改善の取り組みの活性化をもたらすとされている。具体的には、以下のように述べられている。

第3 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

各教科等の指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 第1の3の(1)から(3)までに示すことが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。

(注) 第1の3の(1)から(3)は以下の通り。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

(『中学校学習指導要領』第1章総則：小学校、高等学校もほぼ同内容)

ここで述べられている「主体的・対話的で深い学び」は、これまで各教科で行われてきた、様々な優れた授業実践等に共通する普遍的要素とされており、今までと全く異なる形式で授業を行うことではない。例えば昨年9月に文科省が説明を行った際の資料には以下の記述がある(文部科学省, 2017c)。

我が国の教育実践の蓄積に基づく授業改善

我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、子供たちの知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育てていくことが重要。

小・中学校においては、これまでと全く異なる指導方法を導入しなければならないと浮足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかり引き継ぎつつ、授業を工夫・改善する必要。

(『平成29年度小・中学校新教育課程説明会(中央説明会)における文部科学省説明資料』)

3 どのように学ぶか - 主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善) -

つまり、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業はこれまでも連綿と行われてきたことであり、その優れた実践の蓄積を共有し、さらに工夫・改善を重ねてゆくことが重要なのである。

本校では育てたい資質として「自主自律の精神」や「積極的な創意と探究心」などを掲げており、自主的に学び、協力しながら学びを深め合う姿勢を重んじる創立以来の伝統がある。多くの学校で既にそうであるように、「主体的・対話的で深い学び」は、本校でも全ての教育活動において日常的に意識され、実践されていることであり、様々な実践の蓄積がある。このような学びが新たな学習指導要領で重要視されている今、改めて本校の実践を、学習指導要領で求められている観点からまとめ直し、共有、またさらなる工夫・改善のための貴重な機会としたい。

(2) 日々の授業や教育実習生指導の実践から

(1) で述べたような「主体的・対話的で深い学び」をめざして、我々は毎日の授業を行ったり、教育実習生を

指導したりしているが、その際に常に心掛けていることの一つに「意味のあるやりとりが行われているか」ということがある。ここで示す「やりとり」とは、生徒が教師と、また他の生徒と声を出して行うコミュニケーションはもちろん、生徒が教材と対峙することや、自分自身と心の中で行う対話など、抽象的なものも含めた広い意味でのやりとりである。「意味のあるやりとりが行われているか」と問うことは、「生徒の頭がしっかりと働いているか」と考えることに他ならず、一つ一つの活動を何をめざして行うのかを明確化することにつながる。

以下に、意味のあるやりとりになっていそうで、なっていない場面の例を挙げる。どの場面も「生徒は意味のあるやりとりを行っているか、生徒の脳はフル回転しているか」と自問することで、様々に改善することができる。

- ・教師が英語を話すたびに、同じことを日本語でも言う。
 - 生徒は教師の英語を理解する必要がなく、日本語脳しか働かせていない。
- ・新出事項を含む例文が唐突に提示されるが、自然な文脈の中で意味を持つ文になっていない。
 - 文法的な面にだけ意識が行き、その表現が実際にどのような場面でもどのような感情を伴って用いられるかにまで思いをめぐらせることができない。
- ・教師が熱心に説明し、生徒はひたすら聞くことに徹している。
 - 生徒に考えさせたり、生徒の反応を拾ったりする場面を設けないと、何も考えずに聞き流してしまう生徒が出てくる可能性がある。
- ・教科書本文を教師に続いて生徒たちが何度も音読している。
 - この音読練習のゴールは何か、生徒に何を求めるのかを教師が意識していないと、生徒は何も考えずにただ文字を音声化しているだけだったり、無表情な英語になってしまったりする可能性がある。
- ・ゲーム形式で、生徒が目標文を用いてできるだけ多くの相手に質問して回っている。
 - とにかく多くの相手に質問することだけに一所懸命になり、機械的なやりとりになってしまう。
- ・一人の生徒が英語でスピーチを行い、他の生徒はただそれを聞いている。
 - どのように聴くべきかの指導をしておかないと、何も考えずに聞き流してしまう生徒が出てくる。

授業計画や生徒に与える課題を考える際、「何を行うか」にまず着目してしまいがちだが、なぜそれを行うのか、生徒にどのようなになってほしいのかを考えることにより、「どのように行うか」を考えることができ、延いては「主体的・対話的で深い学び」を考えることにつながる。本校の実践の多くは他の学校でも行われていることであるが、常に「意味のあるやりとり」が行われるような配慮が随所になされており、それを明示的にまとめることには大きな意義があると考えている。

(1)(2)で述べたように、次期学習指導要領で重要視されている「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなことなのか、なぜ重要なのかを掘り下げ、この観点から日々の授業実践をまとめ直すことは、蓄積してきた実践の共有に資するテーマであると判断するに至った。よって、「新学習指導要領を踏まえた指導のあり方(2) - 『主体的・対話的で深い学び』を実現する学習者の育成 -」を本年度の研究発表テーマとして取り上げ、議論を進めることにした。

3. 「主体的・対話的で深い学び」とは

ここでは、改めて「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」がそれぞれどのようなことを意味しているのかを整理する。

(1) 「主体的な学び」

中央教育審議会(2016)によると、「主体的な学び」は「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」学びと説明されている。外国語に興味や関心を持ち、自分の人生と関連付けて学習に取り組むためには、そもそも「なぜ外国語を学ぶのか」という目的を生徒が持っていないといけない。教師は生徒がそれぞれの目的を考えたり感じたりするための機会と正しい情報を与えることが求められるだろう。また、見通しを持って粘り強く学習に取り組むためには、単に言われた通りの学習をするのではなく、生徒自身が具体的な目標を設定し、その実現のために何をどのくらいしたらよいかを自分で考えることが重要となる。教師は単にやることを指示するのではなく、何をやったらどんな力がつけられるのかをしっかりと示し、生徒が自立した学習者として学習の計画を立てられるように支援することが望ましい。加えて、粘り強く続けた学習の結果、自分のできるようになったことは

何か、課題は何かを意識させることも必要である。生徒自身が話したり書いたりした英語を振り返る機会を多く作り、自身の工夫や粘り強い取り組みの結果、何かが実際にできるようになった、上達したという実感が持てれば、それが自信となってさらに主体的に学びに向かえるようになる。また、中央教育審議会（2016）にもあるように「発達の段階に応じて、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定すること」も生徒が興味・関心を持って主体的に学ぶ上で重要となる。

(2) 「対話的な学び」

「対話的な学び」は「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」学びと説明されている。また、外国語教育における改善・充実の視点として「コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場面を計画的に設けること」が挙げられている（中央教育審議会，2016）。英語で行うことを基本とする英語の授業では、他者とのやりとりを通して教師や他の生徒から学ぶ機会も多い。例えば、他の生徒や教師と実際に英語でやりとりをしたり他の生徒の発表を聞いたりすることで、相手を尊重する態度を身につけるだけでなく、表現の工夫や自分とは別の方略に気がつくことができ、そうした気づきが自身の英語の質を高めることにつながるということが考えられる。また、ALT と対話することでその ALT の文化的な背景について知り、異文化について実体験として理解を深めるといったことも英語の授業ならではの場面である。このように、英語そのものについての気づきや学びはもちろん、純粋に母語の代わりに英語を用いて相手の意見や考え方、文化などを知り、自身の考え方を深める「対話的な学び」の姿は、英語学習の目標の一つでもある。加えて、「先哲の考え方を手掛かりに考えること」とあるように、目の前の相手に限らず、教科書などの教材を通して実在の人物の生き方や考え方に触れるなど、読んだり聞いたりする活動も「対話的な学び」につなげることができることが示されている。

(3) 「深い学び」

「深い学び」は「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」学びとされている。外国語教育における改善・充実の視点では、「言語の働きや役割に関する理解、外国語の音声、語彙・表現、文法の知識や、それらの知識を五つの領域において実際のコミュニケーションで運用する力を習得し、実際に活用して、情報や自分の考えなどを書いたり話したりすることや「外国語教育における『見方・考え方』を働かせて思考・判断・表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等がされる『深い学び』につながり、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにする」ことが挙げられている（中央教育審議会，2016）。ここからわかることは、英語の学習においては単に英語についての知識や技能を身につけただけでは不十分であり、そうした知識や技能を実際のコミュニケーションの場面で適切に活用し、活用することで絶えず思考し、判断し、表現しようとし、その結果さらに深い理解へとつながっていくことが重要であるということである。一方向的な知識伝達や形式的な練習、教科書の単純な読み取り等では「深い学び」が実現されることは決してない。授業が実際のコミュニケーションの場であり、学習した内容を実際に活用して自分の思いや意見を表現する機会があり、他者と関わるなどして自身の考えを広げたり深めたりする場面があり、最終的に自身が発したものを評価したり振り返ったりすることを通してはじめて「深い学び」は実現される。教師にはそうした「深い学び」につながる活用の場面をどう設定し、どう支援・評価するかという facilitator（促進する人、進行役）としての資質も問われることになる。

本校の英語教育活動を改めて見直すと、上で整理したような「主体的・対話的で深い学び」が行われていると考えられる場面がいくつもあることがわかる。次項では本校で何年も行われてきた実践や、ここ数年で取り入れた実践の中で、「主体的・対話的で深い学び」が実現されていると考えられる場面をいくつか具体的に紹介する。

【参考：外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方】

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

（中央教育審議会，2016）

4. 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習者を育成する指導事例

ここでは、本校で実際に行われている実践の中で、前項で考察した「主体的・対話的で深い学び」が実現できる（あるいは実現できている）と考えられる例をいくつか取り上げ、各活動のねらいとともに考察する。

(1) 新文型の導入（オーラル・イントロダクション）

授業における実際の指導過程の中で、「オーラル・イントロダクション」あるいは「英語で新文型の導入を行う方法」は、「主体的・対話的で深い学び」を実現する重要な指導法の一つであると言える。それは、以下のような理由からである。

例えば、昨年度の本誌で過去の研究協議会公開授業で行った新文型の導入（オーラル・イントロダクション）の指導過程構想上の考えとして、次のようなことを示した。

- ① 前時の学習内容の復習から入り、その話題や表現を利用することで、無理なく新出表現を導入する。
- ② できるかぎり生徒に語りかけ、答えを拾いながら学習目標へ達するような「帰納的」な進め方を探る。
- ③ 口頭練習はコースだけでなく、個人指名も行って、表現が身についているかを確認する。
- ④ 最終的な文法の確認は日本語で行う。ただし、その場合も極力生徒から情報を引き出してまとめていく。

そして、実際の授業の様子（教師と生徒の発言）をビデオから紙面に書き出し、各指導のねらいとともに表にして示した。

上記の考えと実際の指導の様子を改めて「主体的・対話的で深い学び」という視点で分析してみると、①は「主体的な学び」を促す方法であると言えよう。それは、生徒に身近な話題や既習の表現を利用することで、使用されている場面や表現を理解しやすく、それ故に誰もが参加しやすいからである。そのことによって、生徒は受け身の姿勢で教師の話聞くのではなく、積極的に言語活動に取り組むことになる。また、②は「対話的な学び」を実現する方法であると言える。それは、オーラル・イントロダクションの真骨頂とも言える、教師と生徒のこぼのキャッチボールで導入場面が進んでいくからである。しかも、教師が一方的に（演繹的に）教え込むのではなく、生徒に気づかせるような帰納的な指導過程を探ることで、生徒の思考が活性化される。そして、③と④は「深い学び」につながる方法であると言えるだろう。③については、とかく口頭練習は学級全体のコースだけで終わってしまいがちであるが、それでは個々の生徒がどれほど新しい表現をきちんと理解しているかがどうか分からないので、個人に言わせることで一人一人の生徒にその表現がきちんと定着しているかどうかを診る必要がある。一方④については、英語を使った帰納的な指導では理解しきれなかった生徒に対して、母語で学習内容の要点を整理するようなまとめを行うことで、理解を一層深めることができる。

以上のことから、①～④のような方針の下で、生徒が興味・関心を持つような話題で状況設定を行い、生徒に語りかけながら生徒の発言を利用して話を進め、目標とする表現を示しながらその表現が理解できたかを確認するような活動を仕組み、最終的には生徒が目標とする表現を論理的に理解できるように思考を整理するような指導過程を採れば、その一連の活動が生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するものになると考えられる。

なお、実際の指導の様子（教師と生徒の発言）は、昨年度『第45回研究協議会発表要項』（筑波大学附属中学校、2017）のpp.101-104に要点の抜粋版が、当日資料に完全再現版があるので、そちらを参照いただきたい。

(2) 教科書の題材ごとのライティング活動

教科書の題材を扱うときに、内容理解、音読練習で終わらず、ぜひ本文を活用する活動につなげたいものである。そこで本校では、教科書の題材ごとにライティング活動を取り入れている。活動の内容は、教科書の内容のリプロダクションに近いものから、学んだ表現を使ってテーマを設定して書くもの、さらには内容に対して自分の意見を述べるもの、と各題材の内容に合わせてさまざまなものを設定している。

本校の課題として「書くこと」の力が他の3技能に比べて達成率が低く、さらに苦手とする生徒が多い傾向にあるということが学力調査やアンケートからわかっている。大きな原因の一つとして、音声中心の授業となることで「書くこと」に割く時間が少なくなっている、ということが考えられた。そこで、その課題を克服すべく、意図的にライティング活動を取り入れるようになった。

それぞれのライティング活動の内容によって難易度は異なるが、どれを行うにしても、教科書の内容をきちんと理解する必要がある、生徒に「書きたい」と思わせるようなテーマを提示することで、教科書の基礎内容を自ら学ぼうとする姿勢をつくることができている。また、教科書に出てきた表現を習得しただけでなく、自分のラ

イティングにおいてそれらを活用できるようになる必然性があり、自ずと「深い学び」につながっている。

さらに、書いて終わりなのではなく、全てのライティング作品に教師が目を通し、良いものをピックアップして授業においてクラス全体で読み合ったり、common errorsを共有したりして、生徒同士がお互いの作品から学び合う活動を行っている。そうすることで、新たな表現の工夫や違ったライティング形式等に気がつくことができ、生徒自身が自分のライティング作品を見直すきっかけとなる。それが、次回からのより質の高いライティングにつながっていくと考える。この一連の流れは他者だけではなく自己に対しても対話的であり、さらに深い学びへとつながっているとと言えるだろう。

ライティング活動は、添削作業に膨大な時間がかかるので、敬遠されがちである。しかし、生徒が書いたもの一字一句を教師が添削するのではなく、それぞれのライティング活動ごとに観点を絞って作品に目を通すことで、大幅に時間を節約することが可能である。そして上記の通り、他の生徒が書いた作品から生徒が自ら学べるよう工夫することで、学び合いが生まれるのである。

教科書の題材ごとのライティング活動の例は以下の通りである。

New Crown English Series 2

教科書の題材	ライティングのテーマ	書く内容
Lesson1 Aloha!	Paul's summer vacation	本文のダイアログを第三者としてレポートする。
Lesson2 Peter Rabbit	The Tale of Peter Rabbit	ピーターラビットの物語のあらすじを書く。
Lesson3 The Ogasawara Islands	① Protect Turtles! ② The talk from turtles	①小笠原のカメを守るためにできることを考えて書く。 ②カメの立場に立って教科書本文を書き換える。
Lesson4 Enjoy Sushi	Famous things in Japan	本文を活用し、日本の有名なものについて書く。
Lesson5 Uluru	My opinion about Uluru	3人の中学生のUluruに対する意見を聞き、それらを踏まえて、自分の意見を書く。
Lesson6 My Dream	My Dream	スピーチの形式に従い将来やりたいことについて書く。
Lesson7 Presentation	Presentation	グラフに基づいたプレゼンテーション原稿を書く。
Lesson8 India, My Country	Useful Japanese words	外国人に覚えてほしい言葉とその理由を伝える文章を書く。

※年度末までの予定を含む。

(3) スピーチに続く Q&A 活動

スピーチ等の発表活動という、発表原稿をあらかじめ準備し、その原稿に沿って発表者が一方通行に伝える活動で完結してしまう場合が多いのではないだろうか。本校では、スピーチ発表の後に Q&A 活動（スピーチに関連した質問を ALT からされ、その質問に即興で答える活動）を行い、一つの活動が「発表」と「やりとり」の二つの側面を持った活動となるようにしている。

スピーチ発表の後に Q&A 活動を入れることで、スピーチ原稿を作成する時点から、聞いている相手はどんな観点でスピーチを聞いてくれるだろうか、どんな質問をしてくれるのだろうか、と自分自身で自然と想定しながら準備を行うようになる。ただ一方的に言いたいことを伝えるのではなく、質問をしてもらうために、「聞き手」にどのように自分のスピーチを聞いてほしいか、を主体的に考えるようになる。さらに、この時点で自分のスピーチ内容について聞き手とのやりとりを想定することは、よくわからない英文を並べ、ただ暗唱するだけのスピーチをすることはなくなる。常に相手意識を持ち、自分のスピーチ内容に責任を持ち、聞き手に伝わるようなスピーチを心がけるようになる。こうした過程で、自分自身との「対話」が必然的に行われている、と言ってもよい（図 1 参照）。

発表はクラスメイトの前で行われる。(4) 発表の最中／後にお互いから学ぶで詳しく述べるが、発表活動の中では、お互いの発表から学び合うことができるよう相互評価を行っている。他者の発表内容や態度から学ぶことができることはもちろんのこと、Q&A 活動をお互いに見合うことは、自然な英語のコミュニケーションの場でのやりとりから、バリエーションに富んだ質問内容、質問の仕方、そして答え方を見て聞いて学ぶことができる貴重な機会となる。実際のコミュニケーションの場面で、英語についての知識や技能を適切に活用する他者の姿を見ることで新たな表現方法や工夫に気付き、自分の発表活動全体を見直し、よりよいものにしようとする態度は、主体的で対話的な学びそのものであると言える。さらに、異なる場面で自分のものとして使ってみようとすることは、深い学びへとつながってゆくものと考えられる。

スピーチとQ&A実施要項 No. 115

英語で自己紹介：再チャレンジ編

- 実施日 ① 1月8日(水) 前半班...with Mr. MacRae
② 1月15日(水) 後半班...with Mr. MacRae
※実施日・発表場所はクラスを分けて行います。
※Tanya先生は既婚者、MacRae先生は既婚者で、該当生徒は指定の場所へ。
- 内容 スピーチとQ&A(同じことを2回にわたって2回行います)
・前半の50秒、自己紹介スピーチ
・後半の50秒、TanyaMr. MacRaeの質問に答える
・初めての活動で緊張するだらうけど、頑張ろう!
- 手順 ① ALT用の詳細・コメント用紙を前記入して先生に渡す。
② 発表場所に移動してスピーチを始める。
③ チャイムがなったら、きりのいいところでスピーチをやめ、ALTの質問に答える。
④ チャイムがなったら、Q&Aをやめ、席に戻る。
- 課題 ・右ページに今回の課題を書く。
・本書は原稿を見ずに発表するので、暗記して発表するようにしっかりと練習する。
・話し手は聞き手を意識して、はっきり大きな声で発表する。
・聞き手は発表者の意図を聞き取るように真剣に聞き、また質問の発表からよい発表のヒントを得る。
・発表後は自分の活動を振り返るレポートを作成して提出する。
- 留意点 ① 原稿を書く上で
・原稿の柱を1〜2つ立て、話が広がっていく(深まっていく)ような構成を考える(興味ある事実の羅列はしないこと)。
・第一の話し相手はALTであるが、仲間にも聞かせるスピーチであるので、できるだけ質問の表現を使いわかりやすい内容にする。
② 発表する上で
・重要な情報(名前、場所、内容等)はゆっくり、はっきり言う。
・顔を上向き、相手の目を見て、堂々と笑顔で話す。
・正しい発音、リズム、イントネーションで話す(そのための練習をすること)。
③ Q&Aに備えて
・あらかじめ予想される質問を考え、その回答を考えておく(裏面利用)。
・質問の内容がわからなかった時の対応を考える(聞き返しの表現の復習)。
・答え方がわからなかった時の対応を考える(その場を乗り切る方法の学習)。
- 備考 ・当日はIDカードを忘れないこと。
・振り出しレポートは必ず提出すること(提出日:5日)。
・※「振り出し」学習の力を高める(次年度が目標設定でも重視される)。

<事前課題①> スピーチ原稿を書こう!

※7月に行った自己紹介スピーチの実施要項・原稿を参考にしよう。

Hello, Mr. MacRae / Tanya. My name is _____
(I'm thirteen years old.)
My birthday is September twenty-second.
I'm an only child so I don't have any brothers or sisters.
I like English and _____ I like English because I have been in The United States for one and a half years because my father had to work there.
I like observing nature and sometimes make specimens.
But I don't like sports because I'm not good at it. I'm in the swimming team to practice swimming.
I don't have any pets but my grand father used to have a cat at his house.

Thank you.

※一度書いて終わりにするのではなく、何度も推敲しよう。

<事前課題②> 予想される質問とその答えを書こう!

実際に何を問われるかはわかりませんが、自分の話した内容で相手がいっついてきそうなることを予想し、その答えをあらかじめ用意しておく、少し気持ちは余裕が出ます。

What specimen do you have?
I have butterflies.
Why do you like specimens?
Because it is fun to collect things.
Why were you in The United States?
Because my father had a work there.

図1 スピーチ原稿及び想定される質問を考えるためのワークシート

(4) 発表の最中／後にお互いから学ぶ

スピーチ等の発表活動はいわゆる「やりとり」ではないことから、「対話的な学び」の場とは考えにくいようにも思われるが、発表者は自身の発表を聞いてくれる聞き手に合わせて内容を考え、実際の聞き手の反応を見ながら話し方や視線などを工夫するという点で、発表者個人だけでは成り立たない活動である。

一方で、聞き手の生徒も単に観客として発表を聞くだけでなく、お互いの発表から学び合う姿勢で発表を聞かせたい。本校では生徒がお互いの発表から学び合うために、どういったところに注目して発表を聞くかという観点を明確に示し、相互評価をさせている。生徒は右の図2の評価表を使ってそれぞれの観点について5点満点で評価をする。この観点は発表活動の評価の観点と同様の観点なので、生徒はすでに練習をする際にも意識してきた観点ではあるが、発表を聞く際にこうした評価表があることで、どういった観点を意識して他者の発表を見ればよいかも明確になり、よい発表者から何を学べば良いかも明確になる。

また、全員の発表が終わった後には上手だと思った生徒を3名選んで投票をさせ、次の授業で互選の優秀者としてベスト5に入った生徒と、2票以上獲得した生徒をクラスで表彰している。優秀者だけでは選ばれる生徒が固定化することもあるため、優秀者とは別に


No. 003

春休み明けSpeaking Show

- 評価の観点
 - <態度> 十分な声量で、恥ずかしがらず、**look up**して堂々と話しているか
 - <英語> 口を大きく動かし、英語らしい発音・抑揚・強調で読んでいるか
 - <演出> 場面・意味・内容を理解し、**聞き手にそれが的確に伝わる**よう、表情豊かに読んでいるか、
- 評価の基準

上の評価観点を参考に、5段階で友達の実技を評価しよう。

 - 評価観点をかなり高いレベルで満たしている。「スゴイ!」
 - 評価観点を高いレベルで満たしている。「上手だ」
 - 評価観点を満たしている。「ふつうだ」
 - 評価観点に満たされていないものがある。「やや不十分だ」
 - 評価観点を全く満たしていない。「ダメだ」



- 評価表 (3組)

番	氏名	態度	英語	演出	計	番	氏名	態度	英語	演出	計
1		4	4	3	11	21					
2		3	4	3	10	22		3	5	5	13
3		4	3	4	11	23		4	3	3	10
4		3	5	3	11	24		2	3	3	8
5		2	3	3	8	25		4	3	3	10
6		4	3	3	10	26		3	3	3	9
7		3	4	3	10	27		4	3	3	10
8		3	4	3	10	28		4	4	4	12
9		4	3	5	12	29		4	3	3	10
10		3	4	3	10	30		3	3	3	9
11		3	4	3	10	31		4	4	3	11
12						32		3	3	3	9
13		1	3	3	7	33		3	3	3	9
14		4	3	3	10	34		4	3	3	10
15		3	3	3	9	35		3	4	3	10
16		5	3	3	11	36		5	5	5	15
17		3	3	3	9	37		4	3	3	10
18		2	3	3	8	38		5	3	3	11
19		4	3	3	10	39		3	3	3	9
20		3	3	3	9	40		4	3	3	10
						41		3	5	3	11

★優秀者候補 (3名、順不同)
 (22) 番 [] (28) 番 [] (36) 番 []
 ★上記3名には及ばないが「今までより上達したなあ!」と感じられる人 (3名、順不同)
 (4) 番 [] (16) 番 [] (38) 番 []
 投票者: [] 氏名 []

図2 発表活動評価表 (生徒用)

「よく練習してきた、前回よりも上達した」と感じる生徒も3人選ばせ、別に表彰することもある。こうした毎回の表彰によって自分のがんばりが周囲から認められることで生徒の発表への動機付けにもつながる上、聞き手の聞く姿勢の向上にもつながっている。特に後者の表彰は、英語が得意でない生徒でもがんばりが認められるため、そうした生徒が発表に前向きになれるきっかけになっている。

こうした評価活動は、教師が一方的にポイントを示すのではなく、上手な発表者がなぜ上手なのかを生徒自らが思考し、どうすれば自身の発表をさらに良いものにできるかを見出して、実際の発表につなげるといった深い学びにつながる活動である。

ちなみに、本校では発表活動をすべて録画している。ビデオカメラの存在は発表者にも適度な緊張感を与え、また聞き手に対しても、真剣に発表を聞かせる効果がある。もちろん、はじめはビデオカメラの存在が発表者に過度な緊張を与えるという心配もあるが、毎回続けていけばビデオカメラの存在を必要以上に気にすることはなくなる。

こうした発表活動による相互の学び合いは、通常学級単位や少人数単位で行うことが多いため、限られた生徒同士でしか行えないが、先述した録画ビデオを活用することで、さらに学び合いの幅を広げることができる。生徒による相互評価や教師の評価が高かった生徒の発表を各クラスから数名選び、その発表のビデオをすべての教室で共有することで学び合いの幅は広がり、質もさらに高まることが期待できる。また、こうしたビデオを毎年まとめておくことで、発表活動実施前にも同テーマで発表した過去の先輩のビデオを見て自身の発表に活かすこともできるようになり、時間と学年を超えた学び合いも可能となる。

(5) 発表活動の振り返り

「主体的・対話的で深い学び」はスピーチやチャット、音読などの発表活動自体で実現できるのはもちろんのことだが、自分の発表を振り返らせる活動でも実現することができる。本校では英語による発表活動はやりっぱなしにさせず、必ず音声を録音させ、振り返りの活動を行わせている。これにより、自分の現在の英語の力を客観視でき、何ができるようになっているか、今後克服してゆくべき課題は何かを見きわめることができる。音声はくり返し聞くことができ、生徒は言わば過去の自分との対話を通して、その場では聞き取れなかった、あるいは言えなかった部分があっても、振り返りの過程で理解や表現を深めてゆく。ICレコーダーを用いての音声録音や復習での活用は日常的に行っており、生徒にとって自分の音声を録音することへの心理的抵抗は少ないように見受けられる。主な手順は以下のとおりである。振り返り用ハンドアウトの生徒記入例は図3に示す。

- ① 発表時の音声を録音する。
- ② 録音した音声を聞き、発表を言い間違いなども含めて忠実に書き起こし、良い点や改善点を記入する。

書き起こしは自分の話した英語も、(3) **スピーチに続く Q&A 活動**で示したような教師の発した英語も両方書かせる。書き起こしながら感じた様々なことを、良くできていると思うこと（構成、表現、発音など）は青で、改善が必要だと思うところや、本来こう表現するべきだったという点は赤で書かせる。コメントの色や量がバランス良く書けるように指導し、客観性と共に自己肯定感や達成感を味わわせることでさらに学ぼうとする態度を養いたい。

- ③ 観点別に自己評価する。

ハンドアウトに今回の発表に関する準備や練習なども含めた観点を指定し、3段階で自己評価させる。練習段階も含めて広い視野から大まかに評価させることで、自分の発表を客観的にとらえさせることができる。

また、次の活動に備えて全体を見渡すという役割も果たしている。特に次回への目標設定や決意の部分を作り上げる大切な要素となっている。

- ④ 今回の感想をまとめ、次回の目標を立てる。

今回の感想では自分の発表に対する準備や練習への熱心さが実際の発表にどのような影響を与えたかを具体的に記述する生徒が多い。「前回の発表で、…だったから、今回は…を工夫したことが良かったと思う」「練習が足りず、…できなかった。次は…して臨みたい」というように、前回の課題に対して自分がどのように対応したか／しなかったか、その成果がどのようであったかが書かれており、振り返り活動の最も大切にしたい部分である。重要なことは生徒自身が試行錯誤し、その中から課題を設定・追究し、自らの目標に向かって練習し続けることだと考えている。

人物紹介：感想と課題 No. 419

Step 1 録音した音声を書き、スピーチをおこなう。
 Step 2 工夫した点、上手に話せた点などを、黄ペンで書き込もう。
 Step 3 より良い話し方や発音の内容に気づいた点などを、黄ペンで書き込もう。

Speech 練習

The person I respect is George Lucas.
 I respect him because it is not exaggeration
 to say that he has created the current
 film industry. And the view of the
 world of his films is very exciting.
 His most famous film is "STAR WARS."
 I like this film very much.
 This is the strap of "STAR WARS" that
 I bought at the attraction, "STAR TOURS"
 in Disney Land. This attraction is loved
 by many people. "STAR WARS" has been
 loved by people all over the world.

Q&A 練習

Q. How old is he?
 A. I don't know, but maybe 50s or 60s.

Q. How many did he make films in "STAR WARS"?
 A. 6 film... He made 6 films.

Q. Which story do you like?
 A. Episode 6.
 My favorite story is... (書き込み)

Q. Why?
 A. This is very romantic.
 Because... (書き込み)

Classroom Circleの中からいたいた質問用紙を貼ろう。

Evaluation & Comment by Mr. Kalle

Class	No.	Name	Family	Point	Comments	
①Pronunciation	5	○	3	2	1	
②Grammar	5	○	3	2	1	
③Content	5	+	3	2	1	
④Performance	5	+	3	2	1	
⑤Conversation	5	+	3	2	1	

◎ 発音 ○ 文法 + 内容 漢字 絵画
 5: Very good 4: Good 3: Fair 2: Poor 1:??

Step 1 上手だった友人3人から自分が学べることを、取り入れたいことを分析してまとめてみよう。

① ()... (書き込み)
 ② ()... (書き込み)
 ③ ()... (書き込み)

Step 2 原稿作成についてABCで自己評価しよう。
 量かな内容の原稿が書けた 正しい英語の発音で原稿が書けた

Step 3 自分の発表をABCで自己評価しよう。
 十分な声量で話している きちんと発音できている
 原稿の内容が面白い イントネーション・リズムが素晴らしい
 内容に合った適切な感情表現・演出ができている
 レンリア先生とスモールで会話できた

Step 4 自分のスピーチをふりかえって、感想や課題をまとめてみよう。
 最初から話さず話さず話さず... (書き込み)
 また、会話の時に文法が正しく使えなかった部分があったので、普段からレリカ文法を学習したいと思う。

次のスピーチをするときの目標をこうしよう **自信を持った練習を!**

提出日: October 3 (Group A) 提出点 5 点
 October 10 (Group B)

図3 スピーチ活動の振り返りシート

(6) 入門期の学習記録

学びはじめの時期（入門期）は、その後の英語の学び方や学びに向かう態度を決定づける最も重要な時期である。生徒が主体的に英語を学ぶためには、生徒自身が学ぶ目的と目標をしっかりと持つこと、目標に照らし合わせた現時点での自身の課題を把握し、それを解決するために何をしたらよいかを考えること、そしてそれを継続的に実行し、その成果を自己評価した上で、次の目標を設定できることなどが求められる。教師はどうしたら英語が上手になるかの方法がある程度示しながらも、生徒が単に決められた課題を言われるがままやるのではなく、最終的には自分で学習計画を立て、自身で振り返るための仕組みづくりとそれを支援するための働きかけを行わなければならない。特に、教師が直接の支援を行えない家庭学習において自律的に学習に取り組む習慣を生徒に身につけさせることは、主体的に英語を学習する態度を育む上で欠かせない。

そこで本校では入門期に図4のような「家庭学習の記録」を入学から7～8週間つけさせ、自身の学習と向き

氏名 _____ 英語科家庭学習の記録 No. (2)

毎日英語を口にしよう！ 毎日英語を耳に入れよう！

月日	曜日	練習内容 (カードNo.等)	達成 未達	できるようになったこと、気づいたこと、工夫したこと、疑問点、今後の課題等	基礎 I	その他英語と関連したことがあれば自由記述	ご家族確認印
5/1	月	No. 11 No. 11		今日英語で習った No. 11 の英語で数字は足し算、引き算を習った。英語圏の人は (-1) などとはどういっているのか気になった。日本人は、プラスとマイナスだけ...	◎	電車の車内放送を聞いた	○
5/2	火	No. 9 No. 10 No. 12		人の物や言う表現がかわらぬまたという飛びがある。また、男性、女性をまちがえてしまう。これをやるとき、先生の名前と顔が完全に一致して良かった。	○	英語の本を10ページ読んだ	○
5/3	水	No. 10 No. 12 No. 11		英語で足し算引き算は、大きな数の計算になると、リズム良く言う事ができないので、それを直していきなさい。Teen, & ty のちがいが早口になるとまごついてしまう。	○	動物園の園内放送を聞いた	○
4/27	木	No. 9 No. 10 No. 10		今日は、Mr. ~, Her. ~ などが出た。SDカードの音声を聞いてみる。次、間違えてはさすがに... (書き込み)	◎	英語の曲を聞いて少し分かった	○
4/28	金	No. 10 No. 12		今までは、大文字で ABC SONG を歌っていたけれど、小文字で歌ってみたい。少しづつ感じがある。今までの曲もかっこいい。新しい。	◎	お母さんと10分ほど英語で会話した	○
4/29	土	No. 3 No. 5 No. 7		少し前に習った事を復習しました。No. 3 は、数字の教え方。No. 5 は、7 ステ、アスで No. 7 も数字の 21 ~ 100 までの教え方だった。なかなか、体が覚えにくい。	◎	楽符の作曲家の名前を読んだ。	○
4/30	日	No. 9 No. 10		No. 9 の中で、定規がでているが、考えながら発音をするのかと難しい。そして、今までの英語が難しい事に気づいた。注意して言うようにしようと思った。	◎	ディズニー映画美女と野獣の英語音声で観た	○

今週の反省 SDカードの中の授業でやった事を聞いていけば、今週は大体まちがえていたので、来週はできるたけまちがえないように頑張りたいです。

ご家族感想 ラジオやSDカードを家でよく聞いておぼえていきました。映画を字幕なしで観られるようになりました。

※ご家族の方へ... 復習に重点を置いた毎日の家庭学習は、特に英語の場合重要です。この時期にぜひその習慣をつけさせたいと思います。ご家族の方には、お子様の練習を見守っていただき、その様子を「ご家族感想」欄にご記入いただければ幸いです。

図4 家庭学習の記録（実際の生徒の記入例）

合うための仕組みを作っている。この学習記録はどんなことを書けばよいかの枠は与えるが、実際にいつ何をどのくらいやるかは生徒に委ねられているため、生徒は自分で学習計画を立て、実際の自身の学習を振り返って学習方法の改善を図ることになる。ここで重要となるのは、単に何をどのくらいやったかだけを記録させるのではなく、「何がわかったのか」「何ができるようになったのか」を自分の言葉でまとめさせることである。自分の取り組みとその成果を言語化できることは、自分の現状を客観的に分析できることであり、主体的に学習を進める上で欠かせない力である。また、自分の取り組んだ学習がどのような成果につながったのかを自覚させることで、さらなる英語学習の動機づけにもつながる。はじめは上手に言語化できない生徒もいるが、**図4**のような良い例を生徒に紹介し、どんな記録をどの程度つければよいかを示すことで、多くの生徒が自分の成果を言語化できるようになる。

こうした自由度の高い枠組みであれば、学習内容の基本を授業で学習したことの復習と定着の反復練習としつつも、各生徒の実態と必要に応じて独自に工夫した学習に取り組むことが可能となる。例えば、音楽が好きで継続的に英語の歌を聞いて歌詞の意味を調べた、読むことが好きで毎週1冊英語の本を読むことを続けた、というように、自身の興味・関心に応じた学習を盛り込む生徒は毎年一定数いる。また、英語塾や別の教材を使用して学習をしている生徒であれば、それと学校の授業で学習したことを関連付けることもできる。中には「車内放送の英語を聞いて内容が聞き取れた」「英語で書かれた看板の内容が気になって意味を調べたら、思っていたのと少し違った」など、日常生活の中で自ら発見し、わかったことなどを学習の記録として残す生徒もいる。

ちなみに、**(5) 発表活動の振り返り**でも触れたとおり、本校では授業の振り返りや自身の英語をモニターするために、授業中にICレコーダーを用いて個人のSDカードに自身のパフォーマンスを録音させ、家庭でも振り返れるようにしている。レコーダーによって、生徒は自身の課題を客観的に確認でき、その解決に向けて工夫して練習をすることが容易になる。特に、音声面での上達は顕著である。生徒が主体的に学ぶために、こうした機器を上手に活用することも非常に効果的である。

(7) 長期休暇の自主学习

夏・冬・春休みのいわゆる「長期休暇」には宿題がつきものだが、本校でも生徒に宿題を課しており、多くの学校と同様に、ワークブックをやらせたり、副読本を読ませたりしている。特徴的なのは、①生徒が自分で学習計画を立て、自己評価も行う、②休暇後に取り組みをクラスメイトと共有し、お互いの工夫を学ぶ時間を設ける、の2点である。生徒に学習の計画・評価の責任を持たせることで、生徒の自主性を伸ばし、また、友人と互いの学びを深め合うことで、各生徒が視野や考え方を広げられることを目指している。具体的な指導は以下の通りである。

① 学習計画作成と自己評価

長期休暇直前の授業で時間をとり、休暇中の学習計画を立てさせる。その間、教師は机間巡視しながら必要に応じてアドバイスを与える。生徒どうしでアイデアを交換させるのも効果的である。計画表はカレンダータイプ(**図5**)を用いることが多いが、学年が上がるとグリッドタイプ(**図6**)を用いることもある。必ずゴールから逆算して考える backward design で計画するように指導している。

- i) 現在の自分を客観視させ、どのような力をさらに伸ばしたいか、長期休暇後にどのような自分になりたいかを考えさせ、目標を立てさせる。
- ii) その目標に到達するために、どんな学習が必要かを考えさせ、具体的な学習計画を表に記入させる。カレンダータイプ(**図5**)の場合は毎日の学習内容や感想も記録させる。
- iii) 休暇の折り返し地点でそこまでの取り組みを振り返らせ、後半の学習計画を修正させる。**(図7)**
- iv) 休暇後、全体の取り組みを振り返らせ、伸びたと思う点や今後の課題などを記入させる。**(図8)**

さらに力を伸ばす/弱点克服のための
第1学年英語科 夏休み英語上達日記 Summer 2018 No.75
夏休み中の学習記録簿

全体目標: **リスニング力を高め書けるようになる**
前半目標: **さまざまな英語を覚える**
手段・方法: **積極的に英語に関わる**

＜目標と評価の仕方＞ ①48日間の目標と前半23日間の目標を立てる ②23日たったところで前半の学習内容を評価し、後半の目標を立てる ③48日終了したところで全体を振り返って評価する

＜記録の仕方＞
・「高単語1」○: 1回 ○: 2回以上 ×: 聞かなかった (※「基礎2・3」等のラジオ講座を聞いた場合は口の中を分割して)
・「高単語2」○: 「高単語1」に書く (※「高単語1」の練習簿に書く) (※2の「高単語2」は「高単語1」の練習簿に書く)
・「自主学習」: 与えられた課題以外の自分で考えて行った学習 (例) 録音する、歌を歌う、映画を見る、新聞・雑誌・本などを読むなど
・「上達日記」: その日の学習で気づいたことやできたようになったことを書く。振り返ったときに自分の歩みが確認できるように

月	日	高単語1	高単語2	その他	高単語1	高単語2	その他	自主学習	上達日記
7	15	P21	P23		P21	P23		ラジオ講座を聞いた	
	16	P23	P25		P23	P25		ラジオ講座を聞いた	
	17	P25	P27		P25	P27		ラジオ講座を聞いた	
	18	P27	P29		P27	P29		ラジオ講座を聞いた	
	19	P29	P31		P29	P31		ラジオ講座を聞いた	
	20	P31	P33		P31	P33		ラジオ講座を聞いた	
	21	P33	P35		P33	P35		ラジオ講座を聞いた	
	22	P35	P37		P35	P37		ラジオ講座を聞いた	

図5 カレンダータイプ

課題を克服するための手段で、
具体的に「何」を「どのように」
「どのくらい」を「書く」こと!

夏休み学習計画・記録表 No.211
Class: 2- No. _____ No.211
Name: _____

自分の課題	計画: 夏休みに何をやるか?	中間報告: 進行状況? 修正点?	振り返り: 夏休みを終えて
思っていること 英語が 言えない	単語を覚えることに集中して勉強する。	単語を覚えることに集中して勉強したが、なかなか覚えられない。単語帳を何度も見返している。	単語を覚えることに集中して勉強したが、なかなか覚えられない。単語帳を何度も見返している。
文法が わかんない	文法の本を読む。	文法の本を読んだが、なかなか理解できない。先生に質問した。	文法の本を読んだが、なかなか理解できない。先生に質問した。
リスニング が できない	リスニングの練習をする。	リスニングの練習をしたが、なかなか聞き取れない。音声を何度も聴いた。	リスニングの練習をしたが、なかなか聞き取れない。音声を何度も聴いた。

図6 グリッドタイプ

【前半23日間の学習達成度】 英語に関わることを積極的には行なったが、逆に、 単語を覚えることも多かった。	【後半25日間の目標】 英語を生活に応用する。
---	----------------------------

図7 折り返し地点の自己評価

夏休みの学習を通しての成果と今後への課題
今までに知っていた単語の他に、新しい単語をいくつも覚えることができたため、今後文法に当てはめて様々な文章ができるようになって感じた。一方で、字に関しては一定数の間違いがあったため、今後これを克服していきたい。

1年 _____

図8 休暇終了時の自己評価

教師側からは共通して提出する教材（ワークブックなど）や取り組んでほしい課題（教科書本文の音読やノートに書く練習など）を示すが、何をどれくらいやるかは生徒各自が自分の予定やペース、英語力等を考えて決める。4技能をバランスよく取り入れることや、「その他の自主学習」を行うなどのおススメの学習法は紹介するが、最終的にどのように学習を行うかは生徒それぞれの判断に委ねており、(6) 入門期の学習記録に述べた指導と一貫性を持たせている。

② 休暇後の取り組みの共有

主に長期休暇明け最初の週の1コマを用いて、休暇中の取り組みを共有させ、お互いの工夫から学び合わせる機会としている。一人の生徒が全体に対して発表する、グループ内で発表するなどの方法があるが、ここではグループ活動の例を挙げる。

- i) 5～6人の班に分け、休暇中に用いたノートを見せながら同じ班の友人に、どのような学習を行ったか、どのような点に留意したか、どのような成果があったかなどを発表させる。
- ii) 各班で「ぜひこの人の取り組みはクラス全員に聞いてもらいたい」と思う班代表を一人選ぶ。
- iii) 各班の代表生徒は前に出て、ノートをモニターに映しながら（教材提示装置を用いる）発表する。
- iv) 代表生徒の発表を聞き、自分の学習に取り入れたい工夫をメモする。

家庭での学習をどのように行っているかを共有する時間は実はほとんどなく、生徒が互いに学び合い、自分の学習方法を見直す良い機会となっている。iv) の後にクラス代表を1名選び、学芸発表会（文化祭）で発表させたこともあり、学年を越えて学び合うことができた。

(8) テストノート

「テストノート」とは、定期考査（年に4回実施）後に提出させる課題で、英語科の他には国語科、社会科、数学科、理科が実施している。その目的は、定期考査を単に各生徒のそれまでの学習の成果を評価する（達成度評

価)だけのものではなく、考査でまちがった箇所を再学習させるとともに、それまでの学習を振り返ってその後の学習目標を立てさせる(形成的評価)というものである。また、それを3年間継続させることで各生徒に3年間の学習成果の記録を残させ、後で振り返ったときに世界に一冊だけの自分のためのものになる“参考書”を作らせるという意味もあるものである。

英語科の場合、指導する学年や教員によって多少のちがいはあるが、おおむね次のような「テストノート」を作成させている。なお、テストノートは授業や家庭学習で使用するノートとは別の専用のノートを準備させている。

ア) 問題用紙、解答用紙、模範解答、放送問題台本、テストデータ用紙(観点別平均点表、観点別得点分布表)を貼り付ける。

イ) 誤答分析(まちがえた理由、正解への道のりの解説)を行う。

※誤答に限らず、全問または文法など一部の問題の正答分析(正解への道のり解説)をさせることもある。

ウ) 反省(授業への取り組み、平素の学習、考査前の学習)と抱負(今後の学習目標)を書く。

※1年次の初期は、保護者に生徒の学習全般に関する感想を書いてもらうことが多い。

さて、このテストノートの指導はどのように「主体的・対話的で深い学び」につながっているであろうか。すでに、ここまで記した内容で重要な点がいくつか見えているが、改めて以下のようにまとめられる。

まず、課題そのものは生徒全員に一律に課されるものであるが、その内容やまとめ方は個々の生徒に任されている。特に、誤答分析の内容は各生徒が自分で考えて構成するもので、まさに生徒の「主体的な学び」が促される部分である。

次に、テストノート作成の多くの部分は家庭学習として行われるが、毎回最初のところは授業中に始めることが多く、そのようなときは生徒たちは仲間といろいろ話しながらノートを作成していつている。また、定期的実施される個別面談(学級担任面談は全員、教科担任面談は希望者)では、大抵テストノートを見ながら教員と相談を行う。このような場面は、まさに「対話的な学び」が行われている場面である。また、先述のように自分が作った自分だけの参考書を改めて読み直せば、過去の自分との対話もできるとも言えるであろう。

そして、何よりもテストをやりっぱなしのものにせず、それを使って理解できていなかった部分を自分の力で解決するとともに、自分のそれまでの学習を振り返って新たな学習目標を立てるという作業は、生徒一人一人に「深い学び」をさせる機会を与えているものとも言えるであろう。

5. 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習者の育成：成果と課題

(1) 成果

今回、研究テーマを「主体的・対話的で深い学び」とし、まずは今まで行っている活動を振り返ってみることから始めた。そこで改めてわかったことは、本校で日常的に行っている授業や教育活動の中には、「主体的・対話的な学び」を実現させる活動がすでに存在し、結果「深い学び」への追究が自然と長い間受け継がれ、行われてきたということである。それは、本校の英語科が目指す「自立した学習者」を育てるということに他ならず、長年培ってきた成果であるともいえる。英語学習に対してだけでなく、元々学習全般に対して前向きな本校の生徒であるが、そのような生徒の間でも、1,2年間での変容、3年間を通しての個々の変容は大きい。そこでここでは、「主体的・対話的で深い学び」を実現してゆくことがどのように生徒に変容をもたらしているのかということについて、いくつかの側面から考察したい。

① 育った生徒の状況から

「主体的・対話的で深い学び」というものが、どのくらい、どのように行われているのか、そして、どのように影響しているのかを、はっきりとした数値で示すことは残念ながら難しい。しかし、本校の生徒の多くが、英語を聞いたり話したりする活動に意欲的に取り組んでいること、生徒個々の発表活動の回数を重ねるごとに上達していく様子や、ライティングの内容が少しずつでも濃いものになっていく様子を目の当たりにすると、4.で示したそれぞれの活動が深い学びに繋がっていると実感できる。さらに、ALTと自由に会話を楽しむことのできる English Room の来室者の多さや、英語科準備室前に設置してある多読用の本をどんどん自分から読み進めていく生徒を見るたびに、主体的な学びが実践されていると感じる。さらに、実社会で活躍している卒業生が本校を訪れた際に、「中学校の英語の授業が今になって本当に役立っている」と口々に言っていることも、本校で培った英語の知識と技能、英語学習に対する前向きな姿勢が、時を超え、深い学びに繋がっている証拠であろう。

② 「英語力調査」の質問紙調査の結果から

5. (1) ①で述べたように、「主体的・対話的で深い学び」の成果を数値化することは難しい。しかし、平成27年度より文科省が行っている「英語教育改善のための英語量調査事業」の質問紙調査【英語に関する意識・経験・学習・授業などに関するアンケート】の結果が参考になると考え、昨年度の結果を考察してみる（文科科学省, 2018）。

英語に関する意識の質問の中には「英語の学習は好きですか」というものがあり、生徒は「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」の4つの選択肢から回答した。全国公立校の生徒と本校の結果は以下の通りである（図9）。

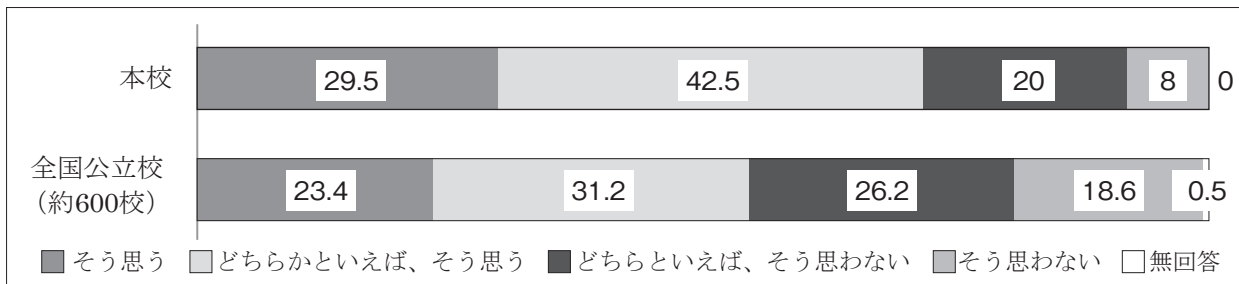


図9 アンケート結果（平成29年度7月実施 公立校約600校と附属中学校3年生対象）

調査された全国公立校の約600校では、約54.6%の生徒が英語学習を「好き」「どちらかといえば好き」と答えたが、本校では、同様に答えた生徒は17%多い72%にのぼった。一昨年度の結果でも、全国平均の約1.5倍の生徒が「好き」「どちらかといえば好き」と答えているという結果もある。ここでは、「英語の授業」についてではなく、「英語の学習」について聞いており、授業の中だけの「英語を勉強する必然性のある状況」のみでなく、幅広い場での学習について尋ねている。つまり、英語学習そのものを自主的に楽しみながら学んでいることが窺える。さらに、この前向きな意欲を持続させていくためには、自身の英語力向上を実感できることが必須である。英語という教科の特質上、英語力を向上させていくには、伝えたい、理解したい相手が必ず必要であり、周囲の人、クラスメイト、教師との対話が欠かせない。そして、何よりも自分との対話が大切である。つまり、「主体的・対話的」な学びが一連の流れとして実現できている、と言えるであろう。

次に、もう一つのアンケートの結果にも注目したい。「どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか」という質問で、最も当てはまるものを1つ選ぶものであり、本校と全国公立校の結果は以下の通りである（図10）。

- ① 英語を使って国際社会で活躍できるようになりたい
- ② 海外でのホームステイや語学研修を楽しめるようになりたい
- ③ 海外旅行などをするとき、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい
- ④ 高校卒業後に、海外の大学などに進学できるようになりたい
- ⑤ 大学で自分が先行する学問を英語で学べるようになりたい
- ⑥ 高校入試に対応できる力をつけたい
- ⑦ 特に学校の授業以外での利用を考えていない

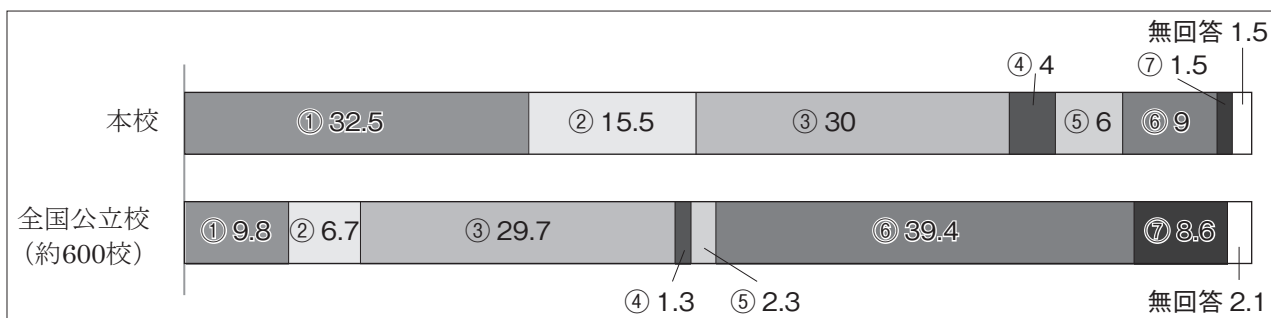


図10 アンケート結果（平成29年度7月実施 公立校約600校と附属中学校3年生対象）

本校の生徒は、英語を使って「①国際社会で活躍できるようになりたい」という回答が最も多く（32.5%）、全国調査の約3倍である。一方全国平均では「⑥高校入試に対応できる力を付けたい」という答えが圧倒的に多い（39.4%）が、本校では6%にとどまっている。本校独自の校風を持っていることや、進路決定の仕方が他の学校とは違うということも関係しているだろう。しかし、この数値の差は、単なる学校の違いだけが原因ではないと考える。目先の定期テストや成績、高校・大学入試云々ではなく、本校生徒は将来の自分の目標達成のため、将来のキャリア形成のために英語学習というものを位置づけており、これは主体的な学びが行われている証拠でもあると自負するところである。そして、将来学んだことを活用したいと思うことこそが、深い学びに繋がっていると推察する。

(2) 課題

①本校の課題

昨年度の課題検討から、本校の生徒は、英語力の高さの割に4技能のうちライティングの力が劣っている、ということが顕著になった（音声指導を重視し、授業を英語で行う伝統があるが、それに比べて「書くこと」に割く時間が少なめになってしまっていることは否めず、それが低い達成率となって表れたのだと思われる（筑波大学附属中学校, 2017））。この課題を受け、教科書の単元ごとのライティング活動をより頻繁に取り入れる等の具体的な改善策を今年度から取り入れている。そうは言っても、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習者の育成を実現させるための取り組みを挙げてみたところ、やはりライティングに関するものが割合として少ないことがわかった。4技能のバランスが非常に重要視されてきている中で、本校がさらに取り組んでいかなければならない課題である。

また4.で述べた活動のそれぞれが、さらに「主体的・対話的で深い学び」につながるような工夫をしていく必要がある。具体的には、お互いのライティング作品を読み合い、その上で直接意見を伝えあったり、意見をつながりのあるまとまった量の文章で書かせたりという活動である。その他には、伝統を受け継ぎ、長い間形をほとんど変えずに行われてきた活動も少なくない。今まで続けてきた活動の良い部分を受け継ぎ、そして、目の前の生徒の実態に合わせ、より進化した深い学びとなる活動に改善し続けてゆく必要がある。

② 一般的な課題

「主体的・対話的で深い学び」の中でも、特に「対話的」を字面だけで読み取ってしまうと、ペア活動やグループ活動、そしてインタビュー活動等のコミュニケーション活動を行ってれば、「対話的」な学びが実現されている、と思われがちである。しかし、インタビュー活動のように、クラスみんなに英語で質問して回り、最後に何人に聞いたでしょうと数を競う活動や、座席のペアでロールプレイ練習や決められた時間、決められたテーマでのチャット等は、果たしてそれだけで「主体的」「対話的」で「深い学び」だと言えるだろうか。

教員という仕事はマルチなものであり、多忙を極めている教師も多いことだろう。教科書をこなすのが精一杯で、「主体的・対話的で深い学び」を生み出す活動を新しく取り入れるのは無理と思ってしまう人もいかもしれない。しかし、既に行っている活動に一工夫するだけで、主体的で対話的な活動へと変化させることは可能である。例えば、インタビュー活動後、その結果を英語でまとめる機会を意図的に設けたり（口頭発表やライティング活動）、ロールプレイ活動後に、ペアで良かった点や気をつけたい点を共有したりするのはどうだろうか。そして、それらの活動が単発で終わらず、日々の積み重ねとなっていけば、きっと深い学びに繋がってゆくであろう。いずれの活動も、準備にあまり時間を要せず行うことができるはずである。

これまで英語学習において「主体的・対話的で深い学び」を実現するための活動例を数多く挙げ、成果を述べてきたが、実際にそれらの活動を実現させるためには、多くの良きインプットが必要であり、文法のドリル練習や教科書本文の音読練習等の基礎的な練習の上に成り立っているということを忘れてはいけない。日々行っていることこそ、第一歩であり、そこから積み上げ、改善、工夫を取り入れていき、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習者の育成を行ってゆく必要がある。

6. まとめ

これまで議論したように、「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、生徒が学習内容に対して「やる気」を持ち、仲間と積極的に関わろうという気持ちになり、学習対象に対して見通しを持ったり振り返りをしたりし

ようと思う活動を設定する必要がある。しかし、そのような活動を行えるような生徒を育てるためには、もう1つ重要なことがあるのを忘れてはならない。それは、授業中に生徒が安心して学習に打ち込める環境を整備することである。それは、どれほど内容の濃い学習内容や有効な教授法があっても、学習が行われる集団（学級）の人間関係がギクシャクしていたり、互いに牽制し合うような雰囲気があると、生徒は学習したり活動したりする意欲を持ってないからである。そのようなことが起こらないように、生徒同士の人間関係を良好にすることを常に念頭に置いて授業をすることは、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための土台を作る上で欠かせないことである。そして、そうした指導を生徒が受け入れてくれるように、私たちは平素から生徒に信頼される教師でなければならない。もっとも、そのような指導を教師個人が一人で行うことは容易ではなく、教科、学年、学校全体の教師が協力してあたる必要がある。教科の指導で言えば、教科内の風通しをよくし、教科の教員全員が同じ目標を目指して取り組むことが重要である。つまり、英語科の教師同士の間でしっかりとコミュニケーションをとるところから「主体的・対話的で深い学び」が始まると言っても過言ではないであろう。

参考文献

- 中央教育審議会. (2016). 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm>, アクセス日：2018-08-06
- 筑波大学附属中学校. (2017). 『第45回 研究協議会発表要項』
- 東京高等師範学校附属中学校. (1910). 『教授細目』
- 文部科学省. (2017a). 『中学校学習指導要領』
- 文部科学省. (2017b). 『中学校学習指導要領解説』
- 文部科学省. (2017c). 「平成29年度小・中学校新教育課程説明会（中央説明会）における文部科学省説明資料」<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf>, アクセス日：2018-08-05
- 文部科学省. (2018). 「平成29年度 英語力調査結果（中学3年生）の概要」<http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_02_1.pdf>, アクセス日：2018-08-13

